

二月のテーマ

病気の活用

目玉の恩

病 気や怪我は何のためにあるのか。それはまず、体の恩を知るためである。体が、こうして、ここにあるとは、すばらしいことだと知るためである。

健康な時には、体のありがたさ、すばらしさが、なかなか分からない。視力のよい人には、目玉のありがたさ、すばらしさが分からないのだ。

腰のよい人には、腰のありがたさ、すばらしさが、なかなか分からないのである。私たちは実のところ「恩知らず集団」といってよいくらいなのだ。なぜか。あなたの顔から目の玉をくりぬいたらどうなるか。すべては暗黒。歩けば、ぶつかる。手さぐりで、トイレも大変。もちろん食事もろくにとれない。野菜の緑、トマトの赤も見えない。

「目玉さんよ、靴はどこか、映しておくれよ」と頼んだことがあるだろうか。そのような頼みごとなど、一切しないにもかかわらず、目はまわりのものを克明に映し出してくれている。シャッターもおさず、調節もしない。フィルムも入れない。それ

でいてカメラ以上にバッチリとまわりのものを映してくれるのが、あなたの目玉なのである。

実は、私はずっと目がよくて、永いこと視力も一・二はあった。目のよいのが、ひそかな自慢であった。もちろん、そのころは目のありがたさ、おかげというようなことは考えたこともなかった。遠くのものがよく見えるのも当然であり、それが幸福なのだという自覚さえなかった。

ところが、どうか。だんだん視力がおとろえ、七十二歳をすぎて、医者から手術をした方がよいと忠告され、生まれてはじめて手術なるものを経験し、前よりよく見えるようになって、まったくおどろいた。医師の進歩はもとよりだが、日常生活では、いかに目が重要であり、いかにありがたいものであるかを、まざまざと実感することができたのである。「目玉の恩」をわずかとはいえ、痛感することができたのである。いうまでもなく、これは目玉だけのことではない。体のどの部分についても同じである。なんとまあ、驚くべき私たちの肉体であることか。

専門家がくわしく調べれば調べるほど、私たちの体は靈妙偉大にできているのである。それで病気になるたり、怪我をしてようやく健康のありがたさに気づくのであるが、それも不十分なことが多いようだ。

痛い！ 苦しい！ 不自由だ！ 早く治して！ なんとかして！

医者は何をしている！ 助けて！ それだけに終わっているのではな

いか。病気になるたり、怪我をした

りしたときは、「ああ、いやだ」と思う反面、すぐに健康の恩を思い、生活のたて直し、気持ちの持ち直しを計ることが先決だ。

「痛くてそんなことを思う余裕があるか」と言ってしまうと、それっきり。その病や怪我にふさわしい、心の、魂の改め方があると、死んでも銘肝して、素直に向上を目ざして応ずることである。

病気は生活の警告である。警報器である。具体的に何を知らせているのかと、わが心に問う。分からねば先輩、友人に聞く。この素直な向上の心が同時に恩を知る心である。

『丸山竹秋選集』より



え・たむらかずみ

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載します。

丸山竹秋